

2023年度体験学習プログラム 参加学生レポート集

海外体験学習プログラム

インドスタディツアー

「インドの農村で学ぶ 女性の自立・教育・経済発展」

事業名	2023 年度 海外体験学習プログラム（インド） インドの農村で学ぶ女性の自立・教育・経済発展
実施日程	事前学習会：2023 年 12 月 1 日（金）、22 日（金） 2024 年 1 月 19 日（金）、2 月 16 日（金）計 4 回 スタディツアー：2024 年 3 月 2 日（土）～ 3 月 11 日（月） レポートの提出：2024 年 3 月 24 日（日） 学内報告会：2024 年 5 月 7 日（火）
場 所	インド（チェンナイ及び近郊都市）
参加人数	学生 13 名、引率 2 名（本学教職員）
参加学生	石井眞依子（文学 4）、中山美代子（農学 4）、黄堂紗文（文学 3）、 川口克基（社会 3）、浦東香実（国際 3）、森川鳳蘭（農学 3）、 吉田友鈴艶（文学 2）、會田智昭（経済 2）、大田雅響（政策 2）、 西田彩乃（経営 1）、蔵田美海（国際 1）、井田あい子（心理 1）、 林口結菜（先理 1）
協力団体	企画・引率：大原 盛樹教授（本学経済学部 教授） Gandhian Unit for Integrated Development Education (GUIDE) 公益財団法人 日本財団ボランティアセンター

1. 目的

ボランティア・NPO 活動センターでは、治安や衛生環境などが安全と判断される海外において、学生がその地域の抱える社会的課題に触れるとともに、福祉分野、環境分野等の現地 NPO・NGO との交流を通して、ボランティア等の体験学習を行うことにより、異文化間における相互理解と共生を学ぶことを目的としています。

2023 年度は、インド南部の町・チェンナイとその近郊の農村部を訪れ、現地の女性たちのエンパワメントを学ぶという目的のもと実施しました。現地で長年活動する NGO の協力の下、農村部の女性の今と未来を見つめます。また、都市部チェンナイでは政府系機関等への訪問を通じて日本とインドの関係性を学びます。

本ツアーは経済学部大原盛樹教授に企画・引率を依頼し、実施しました。

2. 概要

(1) 事前学習会：

4 グループに分かれ、上級生は現地での英語スピーチ内容を、下級生は現地中学校との交流会プログラムの内容を計 4 回の事前学習会で準備しました。また大原教授によるインドの歴史や文化に関するレクチャーを通して理解を深めました。

(2) スタディツアー：

以下のスケジュールにて体験や見学、お話を聴きました。

【1 日目：3 月 2 日（土）】

・7:15 に関西国際空港に集合し、マレーシアを経由してインド南部の街・チェンナイに深夜到着。

【2 日目：3 月 3 日（日）】

・インド日本商工会議所日本語学校訪問
現地学生との交流会/現地学生の案内の下、
チェンナイ市内観光（ポンディバザール、
エリオッツビーチ等）

【3 日目：3 月 4 日（月）】

・AIT-AP 大学の Ashraf 教授よりインドの女性エンパワメントと NGO についてレクチャー
・JETRO チェンナイ事務所訪問
・在チェンナイ日本国総領事館表敬訪問

【4 日目：3 月 5 日（火）】

・農村部へ移動（チェンナイより約 2 時間）
・現地 NGO 訪問、タミル語レクチャー
・紡績工場見学。工場で働く女性の環境を知る。
・パンチャヤット（自治組織）訪問。女性がリーダーの自治組織の在り方について学ぶ。



【5 日目：3 月 6 日（水）】

・現地 NGO より団体の説明及び農村部女性のおかれた状況の紹介
・現地中学校訪問。文化交流会。
恋ダンス披露や日本文化クイズ、折り紙等

【6 日目：3 月 7 日（木）】

・現地 NGO よりこれまでの振り返りと今後の活動先に関するレクチャー。
・地域の大学病院訪問。地域医療の現状を学ぶ。
・農村訪問。有機栽培等の課題についてお話を聞き、実際に畑を見学。



【7日目：3月8日(金)】

- ・国際婦人デーイベントに参加。英語にて日本の女性が抱える問題をスピーチ。
- ・漁村訪問。スマトラ島沖地震以降の生活の変化について学ぶ。

【8日目：3月9日(土)】

- ・世界遺産がある町、マハーバリプラム観光（アルジュナの苦行、クリシュナのバターボール、パンチャラタ、海岸寺院）
- ・カンチープラムにてドラヴィダ様式寺院の見学

【9日目：3月10日(日)】

- ・7:45にホテルを出発し、チェンナイ空港からマレーシアを経由して関西国際空港へ。

【10日目：3月11日(月)】

- ・早朝 5:40 関西国際空港到着、セキュリティ通過後解散。
- (3) レポート提出：学内報告会で配布に向けて、事後レポートを作成し、提出
- (4) 学内報告会：深草・瀬田両会場をオンラインで繋ぎ、実施しました。

3. 参加学生の声

【参加学生】

・農村地域の中学校では、30度を超える薄暗い教室の中で授業を受けていたり、生徒数も3学年で120人程度と日本に比べると少なかった。これは、インドの教育に関する価値観が影響している。貧困層が住む農村地域では、初等・中等教育は直接職と結びつかないため、子供が学校で学ぶことに否定的な親の価値観が影響している。私は今回のプログラムを通して、教育の重要性と自分が今まで享受していた環境が当たり前でないことを学んだ。

・国際婦人デーのイベントでは、拳を突き上げ「strong women!」と連呼している姿が印象的でした。そして、漁村では生業である漁が津波の影響で低迷し、それを成り立たせるために奮闘している話を聞きました。それらの姿は一見前向きに戦う素晴らしい女性たちですが、一方で「女性は強くあらねばならない」という強制意志のようなものを感じたり、女性たちが追い詰められているようにも思えました。現代の日本に生きる私は、弱さを受け入れたり向き不向きを考えますが、インドでは女性差別や災害、気候変動の影響

から前述のように強く行動しないと生きられないのかもしれない、私たち個人個人にできることはなんだろうかと考えました。

4. コーディネーター所感

センターの海外体験学習プログラムは、コロナ禍中はオンラインや国内でのフィールドワークで実施しており、海外渡航を伴うツアーの実施は4年ぶりとなりました。経済学部大原教授に企画・引率をお願いし、コーディネーターも同行して細心の注意を払って実施しました。コロナ禍前後で渡航のあり方も変わり、心配な点もありましたが、全員で無事に帰着することが出来ました。

今回のプログラムでは南インド・チェンナイを訪れました。空港に到着した時から日本とは違う文化の差を感じることが出来たように思います。空気・音・匂い等、現地に来ないと分からない事を、五感を使って体感出来ました。文化の違いに戸惑う場面もあったかと思いますが、全てが学生たちにとっていい経験になったと思います。

内容として、農村部で女性支援の活動をするNGOを訪問し、インドの農村部における女性のエンパワメントを学びました。日本とインド、一見すると全く違う課題を抱えているように思われますが、問題の根本は同じだという事を学べたと思います。

フィールドワークを重視した内容で、数多くの方々のお話を聞く事ができました。現地で草の根的に活動し、多くの方と繋がりを持って活動しているNGOの姿を見て、学生達も地域との繋がり的重要性についても自分事として感じる事が出来たと思います。

センターの理念・目的として『国際社会に貢献する』というものがあります。国内だけの活動に留まっているとこの視点が欠けてしまう事が多々あります。実際に海外に飛び出し、海外との繋がりを持つ事で自身が国際社会の一員であるという事も実感できると思います。改めて今回は海外渡航を伴うプログラムの難しさを痛感しましたが、それよりもこのプログラムの必要性を実感することが出来ました。わずか10日間の滞在でしたが、学生達の表情も最初と最後で見違えるほどに変わりましたし、発言の内容も大きく変わりました。今回の参加学生がこの体験を活かし、国際社会への意識を高めてくれる事を願います。

また費用面では日本財団ボランティアセンターと2022年3月に結んだ協定を活かし、共催事業として実施しました。おかげ様で参加しやすい金額で実施することができ、多くの学生から参加申込がありました。

今後もただ海外の文化や語学を学ぶだけのものではなく、その国が抱える社会課題に正面から向き合えるプログラムを企画していきたいと思います。

〈深草キャンパスコーディネーター 吉田 裕貴〉

はじめに、インドの地を踏んだ時にまず思ったことは「強烈」である。これまで海外へは何度か渡航してきたが、私はこの 10 日間やっていけるのか、と今後数日心身ともに安定を保てるかどうか心配したのはこのインドが初めてである。日本でぬるま湯に浸かりながら生活していたことを痛感し、専用車で移動している時にはインドで生きている人々を横目で見ながら、私が日本でどれほど怠惰でくよくよ悩むだけの日々を送っていたかという事を反省していた。初日から最終日までを振り返ると、毎日が「思ってたんとちゃう」の繰り返しであった。海外へ行くことは容易ではなく、1 日を乗り切るという感覚で行かねばならないと感じた。なぜなら私が目にした多くのインドの人々は、意識していなくともこのような感覚で生活しているように見えたからである。この感覚はこれから生活していく上で忘れないようにしたい。またインドで日本の文化や日本語を学ぶ人々と交流をした際、日本のことや自分自身のことについて聞かれても曖昧な答えしか返すことができず、自分の国や自分自身のことをよく分かっていないのに海外に行って視野を広げたいと思っている自分はとても傲慢なのかもしれないと感じた。文化の交流ではただ話を聞いて感心することしかできず、自分の国、自分自身のことをよく分かっていない、英語で伝えることができないことが非常に残念であった。



今回私が参加したプログラムのテーマは「インドの農村で学ぶ女性の自立・教育・経済発展」である。私が渡航前に思い描いていたインドの農村のイメージは、日本の江戸時代のような、原始的な方法を用いて農業が行われ、人々が自給自足の生活を行っているというものであった。水回りに関しても水洗トイレは存在せず、水道も蛇口を捻ると濁った水が出てくるものだと思っていた。しかし、実際に訪れてみるとインド農村で行われている農法は私が知っているような機械や化学肥料を用いたりというような日本の農業と似た手法が幾つかあり、水回りに関してもトイレは水洗、蛇口を捻っても飲料用ではないが透明の水が出てきたため私が抱いていた極端な先入観は崩された。些細なことではあるが、この時私は自身が抱いている偏った先入観が危険であることに気づいた。インドの農業は、日本の第一次産業の現状と似た部分が多くあった。例えば日本で第一次産業が多く行われている郊外の農村・漁村地域で進んでいる過疎化はインドでも起こっており、「インドで起こっている問題点」は日本でも起こっている問題であることを実感した。渡航前「世界で起こっている問題点を発見する」ということを念頭に置いていた私は世界で起こっている問題は日本で起こっている問題であり、「同じ問題でも何が違うのか」という視点を持ちたいと考えるようになった。また農村地帯に設立されている病院を訪問した際、参加者の一人が「なぜこの学校に入ったのか(なぜ医療の仕事をしたと思ったのか)」という質問をした。質問をした彼女は、医療に携わりたいと思った気持ちの面でのきっかけが返答されると思っていた。なぜなら、日本では「憧れ」などから将来の夢を決める場合が多い印象を持っていたからである。ところがその返答では「近いから」「給料がいいから」など、現実的な答えが返ってきた。その返答で感じた事は、

私が想像していたような憧れなどで夢を決める余裕はなく、生きていくのに精一杯だから安定を求めているのではないかということである。これも一つの先入観かもしれないし、実際日本でもある程度の年齢になると目指すものが環境によって変化していくため一概にみんなが憧れで将来の職業を決めているとは言えないが、なんとも言えない感情になった。



インドでは、本や教科書を読むだけでは発見できなかった人々の考えや文化を目の当たりにした。その多くはインドの人々と実際にやりとりをする中で発見したことである。今回のプログラムは、これまで生きてきた自分自身を見直す機会となった。今後も自分を見つめ直し、インドの人々に負けないようなガッツを持って生きていきたいと感じた。

今回初めてインドに行きました。現地 NGO や地方農村の様子、JETRO や総領事館など本スタディツアーでしか行けないところに行き、普通の旅行では聞けない話、学べないことが学べました。それらを伝えるため、大きく 2 つにまとめます。

まず 1 つは、インドの貧富の差の激しさです。インドでは確かに経済発展が進んでいて、スマートフォンがかなり浸透していたり、高いビルで働く人々も見られたりしました。しかし一方で、路上で寝ていたり物乞いをしている方も多くいました。路上を歩けば寄付を求められ、観光地に行けばそこかしこに物売りがいる光景は、貧富の差を感じるには十分なものでした。

もちろん政府も対策はしていて、外国の企業を誘致することで働き手を増やしたり、根本の教育を充実させるための補助金を出したりもしています。しかし、そのうちの一つである留保制度が裏目に出ているというお話も聞くことができました。留保制度とは下位の指定カーストの人々を対象に、学生や公務員などの枠を優遇する制度のことです。逆に言えばこの優遇を受けるためには下位のカーストに留まらなければならない、結果的にカーストや差別を固定してしまっているのです。なぜネットを通して世界の価値観に触れられる現代で、明らかな差別であるカースト制度がなくならないのか疑問に思っていた私にはとても納得できる理由でした。

そして 2 つめは、インドの女性たちが追い詰められていることです。具体的には、女性差別が根強く残っていることと、地球温暖化による気候変動の影響を先進国以上に受けていることなどが挙げられます。特に後者に関して原因の一端が日本に住む我々にもあり、知っておくべき現実だと考えます。具体的には、

気候変動により海面が上昇して家を追われた人や、大洪水で生活を失ったなどという話が聞けました。それらを直接聞くことで、これまで環境破壊を繰り返してきた先進国には、発展途上国のためにも環境改善に向けて動く義務があるのだと強く感じました。

また、その追い詰められている状況を自分達で打破しようという強い姿も見られました。団結して鼓舞しあい、女性の地位と権利を守ろうと活動する様はカッコよく、尊敬すべきものでした。同時に、いかに今の自分が恵まれていて、現状にあぐらをかいているかを痛感しました。環境問題や貧困問題、政治的な問題など見て見ぬふりをして、何も行動を起こしていなかったからです。インドの女性たちの生き方に恥じないよう、日本に、自分にできることは何かと探し続けなければいけないと強く思いました。



この 2 点に加え、現地の雰囲気や生活、文化など今回のスタディツアーでしか学べないことがたくさん学べました。企画してくださった大原先生とボランティアセンターをはじめ、支援してくださった方々やお話を聞かせてくださった方々、そして一緒に参加した楽しいメンバー達、このプログラムに関わったすべての方々に感謝申し上げます。おかげさまで大学生活の最後にかけてえのない経験ができました。本当にありがとうございました。

インド海外研修を終えての感想として、まずは私たちの生活下では想像もできないほどの環境下であるということです。例えば水まわりの環境、交通状況、暮らしの不便さなど、私たちの生活は当たり前のように作られたわけではないということです。そのありがたみを噛み締めました。ただ現地の人々は決して苦しい顔を見せず、笑顔で暮らしていました。途上国への支援は少しずつでもなんとかしていかなければいけないと同時に、変化させることの難しさも感じました。



私がとても印象的だったことは 3 月 6 日に行われた中学校訪問での体験です。1.2 回生を中心に準備をしてくれました。まず桜の折紙を作るアイデアが面白いと感じていたのもとても楽しみにしていました。インドの中学校の子達はとてもアグレッシブで日本と違う点においては積極性という部分が優れていました。それぞれが積極的であるからこそ意識や感情がとても分かりやすく受け止められたのだと感じます。最終的に素晴らしい芸術作品ができて、言葉はうまく通じず、ジェスチャーでの完成ではあったものの、逆に言葉が通じなくても気持ち次第でできるのだといった部分に感銘を受けました。正直不安でしかなかったですが、とても達成感がありました。

もう一つ印象的だったのは 3 月 8 日に訪問

した漁村での出来事です。この村の最大の特徴は 2004 年に津波が襲ったことです。その情報は私にとって衝撃的なものでした。ただでさえ被害があるのに十数年たった今でも現実的な幸福と経済的な幸福に雲泥の差があると感じました。その復興作業を政府と GUIDE が一緒になって協力して行なったそうです。村人たちはどんなに被害があったとしても常に村のことを愛し続けているのだと強く感じました。危険な場所だから政府が住む場所を変えてほしいと要請したとしても簡単に動けることではないと強い意志を持っていたそうです。その思いを尊重すべく津波の後に家をなくした人、離れないといけなくなった人は救済されました。政府の方針として津波が来ない場所に住居を移すように促しましたが、村人たちは政府の方針に賛成する人もいれば反対する人もいたそうです。そんな中どちらかというと反対の方が多く、自分たち自身でこの村を守るようにしたそうです。以上のようにインドの方々の方針の意志というものを強く感じました。

また今回は女性に焦点を当てる部分が多かったのも女性として今後の自身の方針を決める上でパワーをいただきました。一気に事を変えることは難しいですが、自分だけ幸せであればそれでいいという考えはよくないと私は思います。だからこそ先進国が発展途上国に寄り添い、何かできることを探さなければいけない。そこには工夫も必要であると考えます。

南インドのチェンナイとその周辺は、日本、特に大阪と似ていると感じた。温暖で湿潤な気候なこともあるだろうが、現地の人のおだやかさ、まちのギャつき方に親近感を覚えた。ただ異なるところもあった。衣食住、宗教をはじめ、常にクラクションが鳴り響く道路や、貧しい人の多さ、格差の大きさは、困惑するほどであった。

今回のスタディーツアーでは、「農村の女性の支援」がテーマであった。農村の女性が置かれている現状として、家父長制のような「家」に縛られた生活を送っている。女性は社会的な弱者として、教育を受けることができない、性犯罪などに巻き込まれるなどの問題を抱えている。こうした問題は、女性が劣位な社会であることに原因を見いだすことができる。いかに、女性の力を伸ばし、地位を向上させていくかが課題である。



今回訪れたパンチャヤットと呼ばれる村の自治組織では、女性が代表を務めていた。女性が代表になったことで、社会的な弱者である子どもや女性の生活を改善することができたという。女性が代表になることで、蔑まれていた人々に光が当てられたと言える。ただ、女性が代表になれば、このような変化が生まれるかといえ、そうではないだろう。このためには、当事者自身が当事者として、変えられる力を持っていることを自覚しておく必要があろう。そのために、

NGO である GUIDE が女性たちに、女性が主張すべき権利の重要性を伝えていた。教育というリソースを与えることで、自身の力に気づき、それを実際に使う力につながったと考えられる。

女性が自由に自身の力を発揮して活躍できる社会をつくらなければならない。これに対して、社会的な慣習や常識が障壁となることも考える必要がある。今回訪れた学校では、男女というものが明確に分けられていた。これは、自然と男女の性差をしめしていることにつながり、社会的な役割、自身の見方を固定化してしまう可能性がある。一方で、これらの課題は日本でも同じことが言えるだろう。しかしながら、日本は、南インドの現状に対する蓄積を持っている。先進国がインドをはじめとする発展途上国にできることとして、「経験を伝える」ことがあるように思う。インドが抱える課題を日本がどのように乗り越えたか、乗り越えようとしているかを伝えることで、いくらかのステップアップをすることができるのではないか。そのために、学んでいく姿勢というものを身に付けることの重要性を学んだ。

最後に、このような機会を作って下さった、大原先生をはじめ、多くの関係者の皆様に感謝を申し上げます。

10 日間という短い時間ではありましたが、インドで貴重な経験をする事ができました。渡航前は、未知数な国というイメージでしたが、滞在を通していい意味でもっとインドに興味をもちました。今回ご縁があって南インドのチェンナイ、またその近郊の農村部でお世話になったことで、旅行やインターネットでは手に入れることのない経験をする事ができたように思います。GUIDE の皆さんをはじめとし、日本の団体とは大きく活動内容が違うことに驚いたと同時に、インドの人々が自分たちの環境を改善しようと熱心に取り組まれていることに気付きました。

私達が住む日本はすでにある程度便利な社会のため、何かに対し熱心に変えようとする取り組みの機会はありません。しかし、インドの人々は、例えその意見に偏りがあったとしても自分達に自信をもって本気で社会を変えようと当事者の気持ちで考えている人が多いなと感じました。



一方で、漁村訪問を通して、厳しい状況に置かれている人々の現状も知りました。2004 年の震災の影響で生活が未だに安定しておらず、以前は栄えていた漁業も気候変動を中心とした様々な影響で衰退しています。これに対し近年、村に住む子供に教育

を受けさせるなど取り組まれているにも関わらず、それに直結した仕事を見つけることが非常に難しいということを知り、どこに向かってどんな改善をすべきか、八方塞がりのような状態だと感じました。同時に、インドの政府がいくら支援をしているといっても根本的な解決にはまだ時間がかかるという印象を受けました。これに対し、私なりに経験したことを踏まえて原因を考えました。考えられる原因として人口に対し働き口、職業が少ないこと、インド政府の支援がここまでまだいきわたっていない可能性があると思いました。それでも、何か自分達で解決しようとする姿勢も大切なのではないかと思いました。最後に村人の方が涙を流した姿を見て、2004 年から今日まで苦しみながらとっくに何度も最善を考えて生活してきたことが伝わってきました。私が思った、解決しようとする姿勢になることすら厳しいほど困難な状況にあることを知り、私の視点だけから物事を考えていたことに反省しました。

これだけではなく、学校訪問において学生にエナジーをもらい、他にも様々な方との交流を通して自分の価値観や視点について考え直す事が多かったです。もう少し自分自身で事前勉強をし、積極的になるべきだったという自己反省もありますが、それも含めて 10 日間、貴重な経験をさせていただきました。

帰国後、自分の書いた 2023 年春期海外体験学習プログラムの願書を読み直した際、今回の渡航の目標は 80%達成できたと思う。その 80%はインドの女性はカースト制や慣習などで男性や両親に自由を縛られている点、NPO では女性の自立を確立するために政府に要望を続けたり声を上げ続けたりする点、日本と同じように農業は稼ぎにくい・稼げない仕事であり耕作放棄地が少なくない点、インド政府はオーガニック農業を進めている割には短期間で大量に生産できる高収量品種・農労働が軽減される化学肥料や農薬を使わざるを得ない点、インドは日本のような年金制度のように配給カードで食料援助・現金援助を受けている点などである。達成出来なかったと感じた点は世界女性の日の際に隣にいた女性の話を深掘りできなかった点、もっと英語でコミュニケーションを取りたかった点である。前者はお互いに英語が未熟だったこと、自分は英語で話しかけ、女性のタミル語をグーグル翻訳で理解するといった会話だったため深掘りがなかなかできなかった。後者はやはり自分の障がいの聞き取りにくさがネックになり、GUIDE の女性の英語について行けずフィードバックすることに精一杯であり話せなかった。一生この障がいはつきまとうが、どうするべきか今回の海外体験学習プログラムで明確になってきたと思う。この経験を糧に 2024 年度の自分の挑戦に活かしていきたい。

JETRO で聞いた「インドに日系企業が進出している」という話と紡績工場に訪ねて考えた事は、インドには有り余るほどの労働力がありそれを活用しようと工場を建てて働き口を確保し、安い賃金で働かせているということである。ある企業は開発途上国に工場を建てて現地の人を雇い賃金を出していることに対し「国際貢献」を唱えている。しかし、その商品は現地の資源を大量に利用してできているものであり、生産する

にあたりなるべくコストのかからないような労働建設・労働環境になっており先進国の基準よりもずいぶん低く、生命を削るように働く現地の人には自国よりも低い賃金を出している現実がある。“労働力が有り余っているから低賃金で長時間労働を課す”という考え方は間違っていると考える。国際進出するならその企業は現地の人々の命を大切にし、持続可能なものを作る責任を持つべきだと思う。私たちは企業の言い分しか分からないためその情報を鵜呑みにし、企業が出す値段で安く購入できている。しかし今回のインド紡績工場に訪ねた際に給料がギリギリで生活できるほどの賃金である事、10 年間以上続けている労働者にも僅かな昇給だけの賃金しか与えられていない事などに非常に驚いた。その真実を積極的に発信していくことが必要だと痛感した。



これまで日本でどこか遠くの物事を本や動画で視聴したり座学で物事として学んだことが、現地の人のお話を聞いたり交流したりすることで実際に起っているのだと考える事ができた。また、現地の人と話すことで新たな真実を知ることができた。

自分が考えている論文内容がどれだけ事前学習・現地での情報収集・ヒアリング・質問が重要か気づかされた。

この海外体験学習プログラムは思い出の 1 つでもあるがそれだけでは済ませず、今後の進路のヒントになるよう考え続けていきたい。

今回のプログラム内容は実に濃密で、私にとってかなりハードな日々でした。序盤から体力的にも精神的にも疲れが溜まっていく一方で、こんなにも音を上げる暇もないくらい毎日刺激的な学びを得られる環境は初めてでした。一般的な旅行では絶対に経験できないようなことばかりで本当に「貴重な経験をした」という言葉では到底言い表せないくらい、私の将来の糧とたくさんの良い思い出になりました。

インド人との交流は初めてで、旅行先で関わったことのある外国人や龍大に来る留学生などとは全然違った人たちで色々な事を感じました。まず初日からアニメクイズで盛り上がりました。留学生に対してもいつも感じていることですが、日本でしか話されていない言語をたくさんの外国人が学ぼうとしてくれていることを意外に思っており、今回もこんなに多くのインド人が日本語を習得しようと学んでおられるのを見て、改めて驚き、本当にうれしかったです。

農村部で中学校に行った時にはとっても楽しく盛り上がりましたが、「チョコレート、チョコレート」とゲームが始まる前から言われたり、それに夢中になって取り合っている様子は私にとって少しショックな光景でした。



GUIDE で学んだことは自分の中でまだ消化できていないことばかりで、もう少し時間をかけてじっくり考えたいです。私の中にもインドを含む発展途上国が経済成長していく中で日本のように地方が衰退・少子高齢化しないために

農村や民族の伝統を強く守った方が良いのではないかという考えはあったのですが、パンチャヤットで聞いたようにやはり村の子供が大学に行くには親が工場勤務をするなど村を離れなければいけないということ、漁村で聞いたように学校が遠く教育を受けにくい、また村で教育を受けても就職先がないという現実を見ても、伝統的な生活を守りながら現金収入を得て都市部と同じ水準の教育を受けるのはやはり難しいのではないかと、やはり経済格差の大きな要因の一つは教育格差に起因するなど、環境や状況、全体的な社会のバランスの悪さに行き詰まりを感じました。

さらに訪問先では女性の活躍するところが見られ、どの方も本当にパワフルだなと感じました。しかし男性と対立しているように感じる部分があったり、されたことを仕返ししているように見えるところもあり、それによって本当の平等からは遠ざかってしまうこと、その先にしか本当の平等は存在し得ないことに早く気づいてほしいと思いましたし、それにはやはり教育が必要ということを感じました。

また言語の壁は早く解消しなければならないと痛感しました。日本語でも難しいことですが自分の言葉で自分の思うように伝えられないもどかしさで毎日苦しかったです。今までの学生生活では、緊張してしまって思うように自分を表現できず、発言する場面を避けてきたところがありました。無理やりでも意見や感想を求められうまく言えなくても何かしら発言することで学びの場以外でも素のままにいられることを知り、コミュニケーションの大切さにも改めて気づかされました。今まで自分の考えていることなどどうせ分かってもらえないし分かてもらう必要などないと思っていましたが、たとえ分かってもらえなかったとしても言葉にすることが大切だということ、拙い表現だったとし

でも理解してもらえることもあるということ、何よりも伝えたいと思うことの大切さに気づきました。



今まで旅行で東南アジアへ行った時にも物乞いなどはよく見られ、その度に自分に何かできることはないかなと漠然と思ってきました。自分は日本で生まれ育ち恵まれているなと思っていました。貧困な地域について何かヒントが得られるかなと思い今回参加しましたが、本当に学ぶことばかりで今までの自分がいかに浅はかだったか、自分の考えの至らなさを痛感するばかりでした。貧困や格差や対立についてだけでなく、それらをめぐって世界がどう動いているのか、社会はどんな風になっているのか、何も知らない自分が情けなく、もっとたくさん学ばなくてはならないと思いました。この先も今回のスタディーツアーをステップにして色んなことを学んで色んなことに挑戦していきます。

私が今回のプログラムを通して一番印象に残っていることは、インドの貧富の差が激しいということだ。実際に街を歩いてみると、ベンツやレクサスといった高級車が道路を走っている一方で、道端には物乞いをする者や伏せている者が数多くいた。次の段落から、この問題に関連したトピックとそれに対する国や NGO の取り組みで特に印象深かった例を 2 つ述べ、最後に感想を述べる。



まず、1 つ目のトピックは女性のエンパワメントについてである。インドでは、女性の社会的地位は低く、男性からの暴力や性的虐待が日常的に起こっている。その要因の 1 つとして男女間の経済格差が挙げられる。インドの経済は未発達であるため、女性の雇用機会が限られている。その結果、女性は男性に依存した生活を余儀なくされ、男性優位の考え方が社会的に根付いてしまい、こういった問題が起きる。インドでは、女性の社会的地位向上を図るとともに女性を暴力や性犯罪から守るための団体、互助グループ(SHG)がある。SHG は、共同で貯蓄や融資プログラムを運営し、メンバーの経済的なニーズをサポートするとともにスモールビジネスを興すことで女性に働く場所を提供し、男性依存からの脱却を促進させる。つまり、女性は暴力や性的虐待といった脅威から解放される。

2 点目は医療福祉についてである。インドでは、農村部に住む貧しい人々にも医療を提供することを目指した取り組みをしている。例えば、基本的な医療サービスの無償化や数回の健康診断やワクチン接種で国から補助金が支給され



るなど国民の健康を維持する制度や取り組みがある。

上記で述べた 2 つを通じて、インド政府は貧富の差を是正しようとしている。私は今回のスタディツアーに参加する前までインドについて人口が多い、衛生状態が悪い、貧困が広がっているという断片的で浅い知識しかもっていなかった。しかし、今回プログラムに参加することで、インドの歴史や文化、価値観に触れるとともに実際に現地で働く日本人やインドの人々と交流する中でインドの実態に迫ることができた。

今回このインド研修に参加できたことをとても嬉しく思います。普段の大学生活では出会うことのない他学部の仲間と共に様々な経験や学ぶ機会を通して自分自身たくさんの刺激を受けました。毎日夕食の際に一人一人が今日の振り返りを発表する場では私は今までそういった経験が少なかったこともあり、かなり緊張し頭が真っ白になりながら話していましたが、そんな中でも毎日人前で自分の言葉で思いを伝えることができたというのは自信に繋がりました。ヒアリングの際も初めはなかなか質問をすることができませんでしたが、徐々に積極的に質問をすることができるようになりインド滞在中に少しは成長することができたのではないかと感じました。また他の仲間の振り返りを通してそのような目線で物事を捉えることもできるのかといった自分の視野が広がるきっかけになりました。

今回私の班では恋ダンスと折り紙という一大イベントがありましたがどちらも無事に成功したことが本当に嬉しかったです。何か月も前から準備し何度も集まって話し合い自分たちができること、やりたいこと伝えたいことを考え何度も企画を練り直しました。直前には先生からのお叱りもあって心が折れかけそうになりましたが、そこで諦めず頂いたアドバイスをもとに最後までやりきることができて本当に良かったです。中学校でみんなで協力して折った桜の花びらが最後桜の木となって1つの形となったとき今までに感じたことのない達成感を感じました。みんな本当に楽しそうに折り紙を折っている姿を見て頑張ってたかった、物事を続け苦難を乗り越えた先にはこんな素晴らしい景色があるのかと感ずることが出来ました。今までの自分は途中で諦めてしまうことも多かったのですが今回経験したことを踏まえてこれからの人生

の苦難にも立ち向かい乗り越えていきたいと感じました。



様々なヒアリングを通して感じたことは政府やNGOの支援があらゆる場所に行き届いているということです。そのおかげで女性のエンパワメントが進み、彼女たちが適切な労働環境で安定した給料を得ることに繋がっていることさらに自らの権利、考えを主張することへと繋がっていることが分かりました。

また下位のカーストにも教育を受ける権利が与えられすべての人が職を得る機会が徐々に広がってきていることを感じました。

しかし裏を返すと国民は政府やNGOの支援に依存していると言えるのではないかと感じました。国民が与えられた機会を有効的に活かし、最終的には自らの力で生活を送ることができるようになるつまり大きな政府から小さな政府へと転換していくことが今後インドに必要となる考え方であると私は感じました。

インドにはいつか行きたいと思っていましたが、このように実現することが出来て大変嬉しかったです。市場やマハーバリプラムの観光だけではなく、GUIDEの人たちと過ごす中で深い学びも得られたことに大変満足しています。

チェンナイに来て一番心に残ったことは、タミルの人たちの人の好きでした。農村部のホテルに泊まった時、近隣のレストランの店員さんはとても親切にしてくれました。メニューの内容が分からず困っていましたが、親切に教えてくれて満足のいく朝食を取る事が出来ました。後日調べると南インドではよく食べられている朝食であることを知り、現地の食を味わえたことがとても嬉しかったです。初日以降は、朝そのレストランに行くと同じやつでいいよね？とスムーズに朝食を取る事が出来ました。どこから来たのか、いつ帰るのかといったお話しして、最終日にはまた来てね、と別れを惜しんでくれました。他にも、渋滞で車が止まっている時に、幼稚園児ぐらいの子どもに経口予防接種をしている看護師さんに降りておいでよと誘われたことがありました。最初はただ手を振っただけなのですが、向こうも興味を持ってくれたようでジェスチャーを交えてコミュニケーションを取ってくれました。その後、その看護師さんに窓を開けるように言われました。最初は怖かったのですが、経口予防接種をするようにと案内してくれていたようで、この人たちに私は子どもに見えているんだと大いに驚きました。また、異国の人も子どもであっても経口予防接種をさせなければいけない、という彼女たちの強い使命感にも感心しました。それ以外にも、マハーバリプラムで遠足中の小学生ぐらいの子供たちに囲まれ、質問攻めにされたこともありました。握手を求められ、警戒心のない笑顔に癒されました。GUIDEの方たちもレクチャー以外に、色々と世話を焼いてくれたのもとても嬉しかっ

たです。

これらをふまえ、見ず知らずの人でも親切にするのがタミルの人たちの性格であるということ強く感じました。以前ニュージーランド留学の際は、店員さんは無愛想で、道端の人と笑顔で挨拶するなど全くありませんでした。仲のいい人たちで固まってしまい、それ以外の人とは交流しないのも今の日本でも珍しいことではありません。そんな中で今回チェンナイに来て、自分と話していることに嬉しそうに、楽しそうしてくれる反応が多かったことでそう感じました。

私が学んだことはアシュラフ教授の講義や、農村でのレクチャー等だけではなく、タミルの人たちの優しさとその希少さだと思います。もちろん、GUIDEの人たちのお話しで心に残ったことも間違いなくあります。レクチャーの中で、私には理解しかなる事も多々ありました。ただ、お話を聞くうちに裏を返せば、彼女たちの生活が物の見方に多大なる影響を与えていると気付きました。インドの人たちの視点に立つと、先進国の成長の被害者であると思うのもおかしくありません。私の好きなファストファッションは、賃金の安い途上国のおかげで安価な服を提供できています。特に若者は品質や環境問題よりも、安い値段で物を買えることが重要なので、この需要が途上国の人たちの産業発展を妨げているともいえるでしょう。このように考えたら、自分の生活豊かにできていることは、インドのような途上国の、しかも目の前にいる人たちの生活の上に成り立っていることに気付くと、とても申し訳なくなりました。安直にGUIDEの人のレクチャーを妨げて抗議をしてしまったことをとても後悔しています。お話を聞き、お互いの立場を理解すると、次はどういった折衷案を作るか、考えさせられました。今回の研修で得た学びを通して、私なりの答えを見つけ出せるようこれからも学び続けたいと思います。

普通に過ごしているとインドに行く機会など滅多にないので、今回とても貴重な経験ができたことに感謝しています。インドは日本企業の進出が増えてきていたり、地下鉄が新たに開通されようとしていたり、発展が進んでいるとお話で伺いました。しかし、インドに行ったら様々な場所に訪問し、話を聞く中で貧困の問題や、いまだカースト制度が根強く残っていること、また女性は力をまだまだつけていっている最中なのだと感じました。

この海外体験プログラムの中で印象に残ったのはカースト制度に関することです。カースト制度で結婚する人が制限されたり、親が勝手に結婚相手を決めたり、特にひどい場合ではカーストが違う相手との結婚では、親が息子や娘を殺してしまうケースもあると知り、とても驚きました。インドは経済格差がますます広がっており、大学に通って海外に行く人もいる一方で貧困で学校に通えない人もいて、教育が全体に広まりきっていないこともカースト制度についての認識が変わらない要因ではないかと思いました。バスの車窓で指定カーストの集落を目にして、今もこんな家に住んでいる人がいるのかと驚くと同時にやはり存在しているのだと考えさせられました。また指定カーストということで最近までは漁村の中で漁業をすることも許されていなかった事など、問題はまだまだ根強く残っていると思いました。



その一方でお世話になった日本語学校の学生のクマレシュさんに話を聞くと、カースト今後なくなっていくのではないかと話しており、若者の中にはカーストをそこまで重要視していない人もいると分かりました。そのことから若者たちの意識、カースト制度に対しての認識が変わりつつあるのかもしれない、今後どうなっていくのかとても興味深いと感じました。

この海外学習プログラムに参加したことで毎日充実した時間を過ごせて、10日間があっという間に感じました。このプログラムではお話を伺う機会が多かったので、もっと人々の暮らしや街中の様子などについても知りたいと思いました。またインドは南と北で全然違うとおっしゃっていたように、まだまだ知らないことがたくさんあると思いました。そのため、もう一度インドに行ってみるのも良いなと感じました。

今回のインドスタディツアーを通じて、ジェンダーギャップが大きいのはインドに限らず、日本も同じ問題を抱えていると再認識しました。海外で働くことも興味を持っているので、JETRO や領事館で働いている方々を見て、改めて将来について考えるきっかけになりました。

またこのプログラムを通して、他学年他学部の人とも一緒に交流、活動することができ、他のメンバーが積極的に発言する姿を見て刺激を受けました。その姿勢を見習い、今後の学生生活にも活かしていきたいです。

この十日間を通じて改めて大学生のフィールドワークの必要性を感じた。

まず、アシュラフ先生の対面の講義ではインドにおける女性のエンパワメントと NGO に関する知見を得られた。また、GUIDE との交流では、女性の声が一部では取り上げられているんだと分かった。私がこのスタディツアーが始まる前、「成果主義、資本主義が広がりつつある経済と人々の暮らしのギャップを埋めるのは NPO、NGO である。」と考えていた。そして、この一考はインドで暮らし、NPO、女性に関する研究を行っているアシュラフさんや GUIDE のメンバーも同じように考えているのではない。実際、私が「SHGs は企業の介入や他の団体と結合して規模を大きくすればより収益の多い自助グループになるのではないか？」という質問に対し、「たしかにそれはそうだが、まだその時ではなく、しっかりと土台を作る期間に今はしなければならない。」というような主旨の回答をアシュラフさんから頂いた。彼の答えが私の考えを補完してくれるものになった。

また、3月4日に訪問した総領事館ではインドの異質さを感じるようになった。多賀さんが教えてくれたインドのスケールの大きさである。これは面積、人口の話ではなく、文化、言語、宗教の多様性も含んだ言葉である。この話の後に女性の社会進出の難しさ、カーストが異なる者同士の婚姻、ご遺体の処理について等の話も伺った上で、悪い面も含めて「多様性」という言葉でインドをまとめてくれたんだなと気がついた。また、留保制度に関する面白いお話を聞くことができた。日本でもかつて、もしくは今でも一部地域人々の心の中では部落差別が残っている。し

かし、この問題は私達の世代ではほぼなくなっていると言って良いと考えている。では何故インドと違って身分制度が消えつつあるのか。それはこの留保制度の有無が原因であると私は考える。低いカーストである事を理由に優遇されるこの制度は低いカーストの人々の教育水準を一部上げることは可能であるが、カーストが上がるわけではない。だから、人々はこの制度に頼り続けなければならない。この負の連鎖を断ち切るためには「上位カーストの希少性を落とす」ことに繋がる政策、法改正を行わなければ、インドは長い間、カースト問題に頭を悩ますことになるだろう。



今回のスタディツアーではこの大きな2つについて集中的に考えることができた。NPO、NGO の完成形とは何なのか、またその一員である私はどうして行かなければならないのかを考えるキッカケとなった。そして、カースト問題は当事者だけが考え、模索しているだけで良いのか、ともフィールドワークを通じて思うようになった。これらに関する事を日本に帰った今も個人的に調べたりしている。これから先も考え、伝え続けることを大切にしていきたい。

今回の研修で過ごした 10 日間は、今までの人生で最も充実していた時間だと言っても過言ではありません。初めての海外旅行でインドの地を踏み、現地で実際に見て学ぶことができ、よかったと思うことが二つあります。



一つ目は、下層カーストの人々の暮らしがどのようなものであるかを感じられたことです。部分的ではありますが、彼らの住む家や着ているものを見たり、肌の色が暗いほど結婚が難しく多額のダウリーを要求されるということを聞くことができました。特に漁村で被差別民の住居を見たときは言葉を失うほどの衝撃を受けました。今もあのような原始的な暮らしをせざるを得ない人々がいて、その原因が生まれにあるということの悲惨さを感じました。

二つ目は、インドの女性が直面する生きづらさを知ったことです。GUIDE の Vasantha さんが、私も家庭内では女性としての伝統的な役割を担っていると話していたことが印象的でした。学があって、社会を変えていこうという行動力を持つ彼女ですら、女性の役割から逃れられないということに少し落胆しました。その後も日本語学校の学生さんや農村部でのお話を聞く

と、やはり根深い規範があるのだと再認識させられました。縫製工場では、従業員の九割が女性なのに対し、管理職の八割は男性だと男性社員が言いづらそうにしているのを聞いて、男性も現状に問題があると気付いていながら改善に向けて動く気がないということも原因なのだと感じられました。

いろいろな活動を終えて最終日に行ったマハーバリプラムとカンチープラムの観光は、本当に楽しいものでした。マハーバリプラムの岩場は見ただけでインドの地理的な歴史を感じられて、灯台の辺りに行くと本当に眺めが良く、あの暑さも吹き飛ばすくらいに楽しめました。カンチープラムではいろいろな遺跡を見ることができて夢が叶ったようでした。特にシヴァ寺院ではたくさんのシヴァリングを見たり、額に印を付けてもらったりして一生忘れられない一日となりました。



この 10 日間の経験は私にとって本当に大切な財産です。このような経験をさせていただき本当にありがとうございました。

龍谷大学ボランティア・NPO活動センター

ホームページ：<https://www.ryukoku.ac.jp/npo/>
E-mail: ryuvnc@ad.ryukoku.ac.jp

深草：〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
TEL：075-645-2047 Fax:075-645-2064

瀬田：〒520-2194 大津市瀬田大江町横谷1-5
TEL：077-544-7252 Fax:077-544-7261